

鬼瓦のルーツを尋ねて 韓国へ ⑩

前橋市 富山 弘毅

2004年4月。新羅の古都、韓国・慶尚北道の慶州（キョンジュ）での鬼探しは続きます。

前号掲載、タクシーでの単独行動で寄った芬皇寺も由緒ある古寺です。美しくみごとな大雄殿もさることながら、大鐘閣（鐘楼）の鬼瓦（鬼板）は気に入りました。



雁鴨池（写真・上）が誕生したのは674年（文武王14）のこと。新羅が百濟、高句麗を滅ぼし領土を広げる過程で手に入れた多くの財産をもとに、朝鮮の統一を祝して建設された贅沢な宮殿でした。

現在は3つの建物が復元されていますが、あくまでも1970年代に行われた発掘調査に基づく推測によるもので、当時の姿はまだよくわからないようです。

博物館のすばらしい展示

さて、慶州の4日目は、まず新羅文化院で、新羅と慶州について、東国大学校観光学科講師・李正美（イジョンミ）さんの講義を受けました。そのあと、李さんの案内で国立慶州博物館を見学しました。



慶州 芬皇寺
(上) 大鐘閣全景
(左) 大鐘閣 北東隅 鬼瓦

アナプチ 復元される遺跡・雁鴨池

何といっても私が感動したのは雁鴨池（アナプチ）です。広大な敷地にひろがる大きな池の中には大小3つの小島が浮かび、絶妙の配置で草木が植えられています。

ここはかつて新羅の王侯貴族が船を浮かべて遊んだ場所。雁鴨池という名前で知られていますが、その昔は月池（ウォルチ）と呼ばれたようで、新羅の風流を感じさせてくれる風光明媚な場所です。



エミシの鐘・聖徳大王神鐘 説明する李正美博士

博物館の敷地内には、東洋一の大梵鐘といわれる国宝「聖徳大王の神鐘＝エミレの鐘」がありました。エミレとは、新羅時代の言葉で「おかあさん」の意味だそうです。772年に完成したというこの梵鐘は、新羅金属工芸の最高傑作といわれています。

さて、慶州博物館本館にも、となりの新羅美術館新館にも、目を見張るような鬼面瓦がいくつもありました。



新羅美術館 新館 閩秀博物館皇龍寺趾館
鬼面文円瓦当



閩秀博物館皇龍寺趾館 鬼面文博



慶州博物館 鬼面瓦 統一新羅

雁鴨池から出土した文化財は、国立新羅博物館の雁鴨池館を中心に保存・展示されています。私にとっては、まさに「垂涎もの」で、1分でも長居したい気持ちでした。さまざまな古瓦、鬼瓦はもちろん、人面の鴟尾などもあって、新羅の瓦文化の豊かさをこの眼で確かめました。



上下5点はいずれも国立慶州博物館 雁鴨池館 鬼面瓦



古瓦研究の大学教授に会う

ツアーのグループは古墳公園、大陵苑(天馬塚)などへ向かったのですが、私は

ここでまた、単独行動をとったのです。

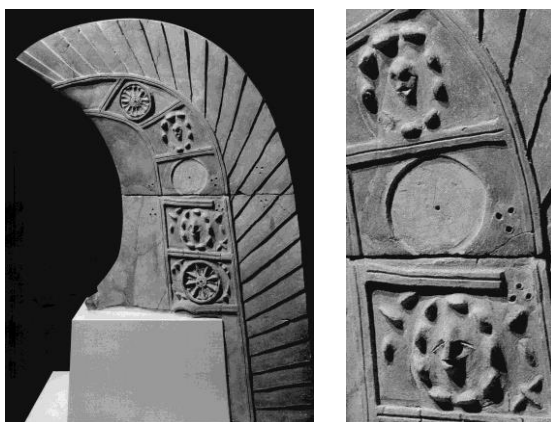
李博士が「鬼瓦なら、研究者を紹介しましょう」とケータイで捕まえてくれたのが、慶州にある威徳大学の博物館長・朴洪國（パクホンクック）教授でした。この方に会えたのは、まさに大ホームランでした。

朴教授は、日本の大学に留学して博士号をとった仏教考古学の研究者で、日本語も達人。なんと私のために、マイカーで駆けつけて下さったのです。

そして、「オニは龍だという説がある」「慶州の鬼瓦には、日本のような立体的なものはない」などと言いながら、テキパキと2つのことをしてくれました。

すごい！ 古瓦のデザイン集

1つは、「新羅瓦埴（がせん）」という古瓦のカタログの残部を探してくれたことです。慶州博物館が2000年秋、「慶州世界文化エキスポ 2000」で古瓦展を開催したときのカタログです。455ページもある大版で、説明付きのカラー写真がぎっしり。新羅を中心とする韓国の古瓦のデザインを網羅したようなもので、すばらしい鬼面瓦もたくさん紹介されています。



慶州 皇龍寺跡 人面のある鴟尾。右は人面部分の拡大。慶州博物館（「新羅瓦埴」より）

歴史的財産をまとめた学者たちの熱意と努力がズシリと伝わってきました。

私は「日本が、秀吉軍の侵略、日韓併合による仏教弾圧（神道強制）などによって



鬼面瓦 統一新羅 慶州博物館（「新羅瓦埴」）

寺院などを破壊し尽した上に、朝鮮戦争で追い討ちをかけられたのに、よくもまあ、「民族的・歴史的文化遗产を本当に大事にしているのだな」、おまけに「4万ウォン（約4,300円）は安い。日本でなら2万円といわれてもうなずくだらうに」などと、感服しました。

日本には、これほど膨大な瓦の写真をまとめた書物は、多分ありません。私の書架を見ても、「法隆寺の古瓦」「常楽寺（長野県別所）美術館蔵・古瓦百選」というような個別の写真集や「九州古瓦図録」のような特定地域のものはありますし、まれに開催される古瓦展のカタログは出版されていますが、日本の瓦文化を網羅するようなデザイン集的出版物には出会ったことがありません。韓国に断然、差をつけられています。



朴洪国教授（左）と崔容大画伯夫妻（崔宅で）

収集家の画家宅を訪問

2つ目に朴教授は、小型のマイカーに私を乗せて、古瓦収集家の画家・崔容大さんのお宅に連れて行ってくれました。

崔さんは日本語は出来ないようでしたが、突然の訪問なのに、奥さんがお茶を入れて歓迎してくれました。そして、秘蔵の鬼面文円瓦と、発見したばかりの鬼面文鬼瓦を見せてくれました。



鬼面文円瓦 崔さん宅で



小さい手で「イーッ」と口を開く
鬼面瓦の部分（崔容大さん宅で）

これは、小さな手で口を開き「イーッ」と悪態をついているように見える、かわいい鬼瓦でした。欠けていて不完全なものですが、その愛嬌たっぷり、遊び心たっぷりのオニは、日本ではとても見つからない、楽しい鬼瓦でした。

韓国語をまともにしゃべることの出来ないもどかしさを感じながら、「カムサムニダ」「コマップスムニダ」をくりかえして崔さん宅を辞し、ホテルまで送ってくれた朴教授と別れました。

私にとって初めての鬼瓦を介した国際交流でした。

その夜、雁鴨池のライトアップを見に行きました。オニがたくさんいる雁鴨池の夜は、幻想的で、とてもきれいでした。

5日目は、慶州市の郊外・万部にある信仰の山・南山築へ行きました。

たくさんの石仏、石塔が点在していました。玉竜庵、塔谷磨崖彫刻群、新羅を統一に導いた名将・金庾信將軍の墓、新羅統一の基礎を築いた名君・武烈王の陵、新羅最古の石仏といわれる拝里3体石、新羅王宮跡の半月城、氷石庫などを見た後、無形文化財の造り酒屋・校洞法酒で88歳の拝（ペ）さんの話を聞いたりしました。

夕食は、前日タクシーで案内された、オニのモニュメントが中庭にあるお屋敷のような料亭「瑤石宮」（前回紹介）での韓定食でした。入口には面白い柱が2本、立っていました。（写真・下）



探索は緒についたばかりだ

慶州に4連泊もして、独自の鬼探し行動を2回もしましたが、改めて地図を眺めると、慶州には寺がとくに多いようで、行けなかった古寺がたくさんあります。もう一度尋ねることが出来るでしょうか。

いや、韓国は広い。北朝鮮もある。「鬼瓦のルーツ」探索は、緒についたばかりだ。一人旅が出来るようにハングルの勉強もしなければなどと、年や体力を忘れて大それたことを考えながら、最終日の眠りにつきました。（つづく）